

「主において常に喜びなさい。重ねて言う。喜びなさい。」

(フィリピ書 4 の 4)

いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。

Rejoice in the Lord always! Again I will say, "Rejoice!"

この聖書の言葉は、よく知られているが、多くの人が、いつも喜ぶなど、とてもできない、と感じる聖句でもある。

真実を語りなさい、といった言葉は守れなくともそのような命令形はごく普通に見聞きする。しかし、聖書以外の本、また一般の家庭や学校などで、どこで、こんな命令を見聞きするであろうか。

これは、命令というより勧めというニュアンスも持っているが、はじめに置かれている「主にあって」(in the Lord)ということが重要である。

主にあって、とは、霊的な主イエス、復活しておられて、聖霊でもある主イエスの内にあって、ということである。

主イエスの内にあるということは、まだキリストのことや聖書のことをまったく知らないという人には不可解なことであるが、神と同様なお方であるキリストの霊の内にとどまっているほど、私たちはその主イエスの力を受け、導かれて歩むことができる。

そしてそのときには、つねに喜べ、というみ言葉に少しなりとも従うことができるようになり、神やキリストを知らなかったときにはなかったことだが、生活のなかの小さなこと一つ一つに対しても喜ぶことができるようになる。また身の回りの自然の美しさ、繊細さなども、主にあるならば、一つ一つが意味をもっているのがわかってくる。

しかし、事故や病気になったときの悲しみのとき、あるいは他人から、悪く言われ見下されるなど、人間関係に苦しむとき、それでも常に喜ぶことができるだろうか。

このようなときでも、私たちが主のうちにとどまり、主イエスにつながっているときには、そのような苦難に打ち倒されずに支えられるのを実感し、主が魂の近くにいてくださるゆえの主にある平安を与えられる。それは主イエスが約束して下さっていることである。「あなた方はこの世では苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。私は世に勝利しているのだから。」(ヨハネ 16 の 33)

そして主の平和を実感するとき、それは感謝となり、静かな喜びが伴う。

「悲しむ者は幸いだ、なぜなら、その人は(神によって)慰められるから。」と主イエスが言われたように、苦難や悲しみの中にも、神からの慰めが与えられることも約束されており、ここに感謝と喜びも生まれるのがわかる。

また、すぐには感謝などできなくとも、時が経つとそのような苦しいことにも深い意味があったことを知らされ、深い感謝の心が生まれ、そこに喜びも生じてくることは多くの人たちが経験してきたことである。

私たちの最も深い喜びは、神の愛に触れるときである。それゆえに、常に喜べ、というみ言葉は、喜ばしいことや苦しいことも含め、またまわりの自然などのできごとも含め、すべてのことの背後に神の愛の御手があるということを思い起こしなさい、という呼びかけなのである。

野草と樹木たち

チシマノキンバイソウ 北海道 大雪山(黒岳)2009.7.21



今年の夏、大雪山の黒岳(1984m)に登って、高山植物に親しむ機会が与えられました。今から44年前、大学生のときには、テントや燃料、食料など重い荷物を背負って大雪山系を一人で縦走したのですが、現在ではロープウェイとリフトがあるから、簡単に7合目の標高1500mの高さまで登ることができます。ある場所から別の場所へと、長距離を車で走行し続け、着くと聖書の集会をする、このようなことだけを続けているとだんだん睡眠が十分とれなくなって体調も不調となり、徳島に帰ってからもなかなか元に戻らないので、今年は集会や訪問の予定も少なくし、かつ、休養日を設けて神の創造の御手による自然の中を歩き、自然という「聖書」をひもとくことを考えたのです。

このチシマノキンバイソウ(千島の金梅草)とは、その名のように、北海道の大雪山や千島列島などに分布している植物で、黒岳の斜面などに群生していて、美しい鮮やかな黄色の花を咲かせています。花の直径は4cm前後。

9月中旬にはこの山系には早くも雪が降るといふ厳しい寒さのなかで、このように短い期間に芽を出し、美しい花を咲かせるのは、驚くべき神のわざと感じます。

人間においても、人生の短さを深く自覚し、厳しい困難に耐えて神に希望をかけて歩んだ人ほど、魂の美しい花を咲かせるのを思わされます。

いつ、どのようにしてこのような花がこの厳しい気候の山岳地帯に咲くようになったのか、それは神秘に満ちています。

人類の現れるはるか昔から、この山々に咲き続けてきたであろうこの花、この緑のなかに浮かびあがる黄色の花たち、それは永遠の神への賛美であり、人間よりもずっと以前からその賛美を続けてきたし、今後もかぎりなくこの美しく咲く花は神への賛美をたたえて咲き続けるであります。

人類の現れるはるか昔から、この山々に咲き続けてきたであろうこの花、この緑のなかに浮かびあがる黄色の花たち、それは永遠の神への賛美であり、人間よりもずっと以前からその賛美を続けてきたし、今後もかぎりなくこの美しく咲く花は神への賛美をたたえて咲き続けるであります。

(文、写真とも T.YOSHIMURA)